【論文】

乳幼児の親に対する養育省察機能質問票を開発する試み

上地雄一郎（岡山大学大学院社会文化科学研究科）・小川紗有美（三宅医院）

幼児の親に対する「養育省察機能質問票」（PRFQ）18項目版の日本語版（PRFQJ）が開発された。原版がバック・トランスレーションを通して日本語に訳された。この日本語版に因子分析を行った結果，確信的省察，省察不全，省察的姿勢という3つの因子が抽出された。この3因子に負荷の高い項目から成る下位尺度のα係数は.80以上であった。この過程で2つの項目がすべての因子に負荷が低いので削除された。この質問票の妥当性確認のために，自己および他者の内面への意識，育児自己効力感，アレキシサイミア傾向との関連を検討した。この質問票で査定される省察機能は育児自己効力感と関連していた。「省察的姿勢」は自己および他者の内面への意識と正の相関を示し，「省察不全」はアレキシサイミア傾向と正の相関を示した。しかし，さらに妥当性の検討を行う必要があると思われる。

キーワード：乳幼児の親，養育省察機能質問票（PRFQ），日本語版，信頼性，妥当性

1．問題と目的

子どもの心理的問題や精神疾患の発生の背景として，不安定型の愛着や養育者（親など）のメンタライジング能力の問題がある。「メンタライジング」（mentalizing）は，人が自己と他者の行動の背後にある心理状態（mental states）について認識することである（Bateman & Fonagy, 2019）。ここでいう心理状態とは，哲学者 Brentano の概念であり（Fonagy: MBT に関する Podcast Unit1, Anna Freud Center），「～について；～に向けられた」という志向性（intentionality）を持つ心の状態である。より具体的にいえば，行動の背後にある考え，感情，欲求，願望，確信などを意味する（Allen, Fonagy, & Bateman, 2008; Bateman & Fonagy, 2016）。そして，親などの養育者が良いメンタライジング能力を持っているなら，子どもの心理状態を的確に捉えて対応できるので，子どもは自分の心理状態を的確に理解してもらえ，何らかの苦痛を体験しているときには養育者（親）にそれを表出して安心と慰めを得ようとする（Allen et al., 2008）。そして，養育者との関係の中でその心理状態が調整される。子どもの心理状態を，養育者が協同で調整するという関係の中で，子ども自身の自己調整能力が向上していく（Midgley et al., 2017）。また，このような関係の中では子どもの愛着は安定型となっていく（Allen et al., 2008）。また，養育者のメンタライジング行為を取り入れることによって，子ども自身のメンタライジング能力も発達していく（Bateman & Fonagy, 2016）。しかし，このような関係に恵まれない子どもにおいては，愛着が不安定型となり，メンタライジング能力も十分には発達しない（Allen et al., 2008; Allen, 2013）。メンタライジング能力の乏しい養育者の下で子どもが体験することは，「愛着トラウマ」（attachment trauma）と呼ぶことができる。これは，子どもが長期にわたって自分の心理状態を適切にメンタライズしてもらえない環境におかれ，長期にわたって苦痛の中で孤立無援であったことによって生じるトラウマである（Allen, 2013）。このトラウマは，先に述べたように愛着を不安定型にし，併せてメンタライジング能力の不全を伴う。愛着トラウマは様々な精神疾患に関与しているが，典型的な結果がパーソナリティ症（personality disorders）である。そして，境界性パーソナリティ症（Borderline Personality Disorder : BPD）を治療するために提唱されたのが「メンタライゼーションに基づく治療」（Mentalization-Based Treatment : MBT）である。MBT は，その後，色々な精神疾患や対象者に拡大されている。例えば，青年期の BPD 前駆症状に対する MBT-A，子どもとその親に対する MBT-C，食行動症に対する MBT-ED，家族を対象にする MBT-F などである。MBT が明確な構造と

手続きを持つ治療パッケージであるのに対して，MBTとまではいえないがメンタライジングの視点による支援法が開発されており，MBTを含めてこれらを総称するには「メンタライジング・アプローチ」あるいは「メンタライゼーションに基づくアプローチ」という用語が適している。

養育者のメンタライジング不全によって愛着やメンタライジングに問題のある子どもとその養育者に対するセラピーの目的は，子どもの愛着とメンタライジングを改善することと並行して，養育者の子どもに対するメンタライジングを改善することである（Midgley et al., 2017）。場合によっては子どもにしかセラピーを提供できないことがあるかもしれないが，子どもを取り巻く社会的環境にメンタライジングが欠けていると，いくら子どものメンタライジングを育てたとしても，そのメンタライジングは子どもが社会的環境にいるうちに衰退する。それだから，子どものセラピーにおいて養育者（親）に対する並行的セラピーは不可欠であり，それが困難であれば，何らかの形で社会的環境に働きかけることが必要である。

そして，子どもとその養育者にメンタライジング・セラピーを行う際には，子どもだけでなく養育者（親）に対しても，メンタライジング能力のアセスメントを行うことが重要である。メンタライジング能力のアセスメントは，「メンタライジングの４つの次元」や「非（前）メンタライジング・モード」などの視点から行われる。メンタライジングの４つの次元とは以下のようなものである。この４つの次元にはそれぞれ２つの極があり，どちらかの極に偏るのではなくバランスが取れていることが望ましい。どちらかの極に偏ると，メンタライジングが歪みやすくなる。

① 自動的（黙示的）VS 制御的（明示的）

自動的/黙示的（automatic/implicit）というのは，メンタライジングが非意識的に行われ，一定の想定をあてはめて即座に心理状態が認識されている場合である。親しい人たちのテンポの良い会話のように，瞬時に相手の考えや感情を読み取り，即座に反応がなされている。このメンタライジングは速度が速いが，誤解も生じやすい。それに対して，制御的/明示的（controlled/explicit）というのは，自己と他者の心理状態を意図的に省察する（考え，感じる）場合のように，意識的で制御されたプロセスである。

② 内的 VS 外的

メンタライジングが内的手がかりに基づいて行われるか外的手がかりに基づいて行われるかという次元である。内的手がかりというのは，自己または他者が置かれた状況，自己/他者について持っている知識，過去にした経験などである。外的手がかりというのは，表情，目つき，動作など外から観察できるものである。

③ 認知的 VS 感情的

認知的というのは，感情から距離をおいた第三者的な認識であり，いわゆる「心の理論」におけるような推理（信念-願望推理）である。感情を例にして説明すれば，その感情が何であるかについてラベリングするような心の働きである。それに対して，感情的とは，自分の感情的反応によるメンタライジングであり，他者の感情に対する共鳴や感情伝染を含んでいる。

④ 自己（焦点）VS 他者（焦点）

これは，メンタライジングを行う際に焦点が自己にあるか他者にあるかということである。焦点が自己にある場合，他者の心理状態も自己の模擬的体験からその体験表象を共有する形で他者の体験を想像する。よりくわしくいえば，ミラーニューロンの働きによって内蔵感覚的（直観的・第六感的）に知覚する。この推測は的確な場合もあるが，焦点が自己にあり，他者固有の体験を推定していないので，誤解にも陥りやすい。それに対して，他者（焦点）というのは，ミラーニューロンによる模擬的・内蔵感覚的認識を抑制して，他者固有の体験を推測しようとすることであり，心の理論における信念-願望推理のような認識である。

次に，非（前）メンタライジング・モードとは，発達的にメンタライジング・モードよりも古い心のあり方であり，メンタライジングが途絶したときに出現する。これには，心的等価モード（psychic equivalence mode），目的論的モード（teleological mode），プリテンド・モード（pretend mode）がある。各モードの概要を以下に示す。

① 心的等価モード

自分の考えや感情があまりに現実そのものであると体験され（現実についての表象だという認識がなくなり），ありうる別の見方を持つことが困難になる。極端な形態は妄想やフラッシュバックである。

② 目的論的モード

心理状態はその結果が観察可能な場合にのみ認識される。目的実現や問題解決だけを求め，そのために必要なメンタライジングを回避する。苦痛・不快を解消するための自傷や暴力などを含む。

③ プリテンド・モード

考えと感情が現実から切り離されている。例としては，現実から遠い抽象的な言葉や専門用語を用いた語り；現実を回避した表面的な語りや不自然にポジティブな語り；自責的でネガティブな反芻的語り，などである。疑似メンタライジングや過剰メンタライジングの形を取ることがある。

なぜアセスメントが重要かというと，支援の対象となる人たちのメンタライジング能力に応じてメンタライジング・アプローチにおける介入法が異なってくるからである。例として，MBT-Cにおける介入法の使い分けを以下に示す。

①子どもや親のメンタライジング能力が高い場合には，明示的メンタライジングを促進し，「共感的承認」を基本としながらも「ありうる別の見方」を探すこともできる。介入法としては一番難度の高い「関係のメンタライジング」が可能である。なお「共感的承認」(empathic validation)とは，子どもや親の感情を徹底して子ども・親の側から共感的に理解して伝えることである。

②メンタライジング能力がそれほど高くない場合や，ある程度メンタライジング能力はあるが一時的に途絶しているような場合には，心理状態への共感的承認を基本とし，感情の共同調整に努める。感情の過覚醒（例えば激怒）を鎮める最も良い方法は，その感情を共感的に承認することである。過覚醒状態ではメンタライジングは失われるので，過覚醒状態を軽減することが先決である。

③メンタライジング能力がかなり低く，心理状態以前に「身体的な感覚や体験」への「注意」(attention)が欠けているか注意の制御に問題がある子どもの場合には，身体的体験に「注意」を向けさせ，「注意制御」の能力を高めるための遊びを行う。この場合には，身体的表現や身体的体験から心理状態を推測するメンタライジング，つまり「身体的体験から心を知るメンタライジング」(embodied mentalizing）が必要になる。

ところで，メンタライジング能力を「心理学的尺度」で測定する場合には，その尺度で測定できるようにメンタライジング能力に独自の定義（操作的定義）を与えなければならない。つまり，その尺度でどのような結果が見られる場合にメンタライジング能力が高い（または低い）のかを明確にしなければならない。このように，メンタライジング能力を操作的に定義した概念を「省察機能」〔reflective functioning（or function)〕と呼ぶ。

成人の省察機能を測定する既存の尺度としては，まずFonagy et al.(1997)が作成した「省察機能尺度」(Reflective Functioning Scale)がある。しかし，これは「親の子どもに対するメンタライジング」を直接的に測定するものではない。次に，Slade, Aber, Bresgi, et al.(2004)とSlade, Grienenberger, Bernbach, et al.(2005)が「養育省察機能尺度」(Parental Reflective Functioning Scale)を作成している。加えて，Ensink et al.(2016)は「児童・青年用省察機能尺度」と「養育省察機能尺度」という，子どもと親に特化した尺度を開発している。しかし，上に紹介したFonagy et al.の省察機能尺度は「成人愛着面接」(AAI）を用いる尺度であるし，他の尺度は「親発達面接」(PDI：Slade et al., 2004）という面接法を利用する尺度である。だから，これらの尺度を使用するためには，まずAAIやPDIに習熟する必要があり，日本ではすぐに利用できる尺度ではない。

これに対して，Luyten et al.(2017)の「養育省察機能質問票」（Parental Reflective Functioning Questionnaire：PRFQ）は，18項目から構成される「質問紙尺度」である。PRFQは，Luyten, Mayes, Sadler, et al.(2009)において，0～3歳の乳幼児を持つ親を対象にした39項目版が作成されたが，最新版（Luyten et al., 2017）では，項目が18に厳選され，子どもの対象年齢も0～5歳に拡張されている。そして，このPRFQ18項目版については，英語以外に複数の外国語版が作成されている。PRFQの39項目版については，今里・東條・上地（2017）がPRFQに基づいて親のメンタライジング能力を査定する「養育内省機能質問票」(Parental Reflective Functioning Inventory：PRFI）を作成した。しかし，PRFIは39項目原版に基づくものであり，3歳までの子どもを持つ親を対象にしている。また，質問項目が日本向けに修正されており，バック・トランスレーションを用いた原版の厳密な日本語版ではない。そこで，本研究においては，最新のPRFQ18

項目版について，バック・トランスレーションを用いて厳密な日本語版を作成し，信頼性・妥当性の検討を行うことを目的とする。

妥当性の検討には，養育省察機能と，①自己と他者の内面への意識，②育児自己効力感，③アレキシサイミア傾向（感情の同定困難，感情の伝達困難，外的志向）との関連を検討する。事前には，以下のことが予想された。省察機能の高さは，①および②とは正の相関を示し，③とは負の相関を示すと考えられる。

2．方法

1. 調査対象

0～5 歳の子どもをもつ母親 318 名。平均年齢は 36.68 歳（SD=4.65）であった。調査は，業者を通して Web 調査の形で行われた。

2. 調査期間

2018 年 12 月

3. 倫理的配慮

調査は，業者（NTT コムオンライン）による Web 調査として行われた。調査は無記名であり，調査対象者に対して，研究への協力は任意であり，回答しないことによる不利益はないこと，および個人が特定されることはないことを Web 上に記載し，プライバシーには十分に配慮した。また，データの管理についても厳重に行うことを明記した。Web 上のデータについては，業者（NTT コムオンライン）によってセキュリティが保障されており，業者から調査者には，パスワードで保護されたデータが送付された。

4. 質問票の構成

質問票は，フェイスシート，養育省察機能質問票，視点別意識尺度（「自己の内面への意識」下位尺度および「他者の内面への意識」下位尺度），Parental Self-Agency Measure（以下 PSAM）日本語版，TAS-20（トロント・アレキシサイミア尺度）で構成されていた。

(1) フェイスシート

「養育者の年齢」，「子どもの年齢」，「子どもの性別」，「子どもの出生順位」，「子どもから見た同居の家族」を尋ねた。

(2) 養育省察機能質問票

Luyten et al.(2017) の “Parental Reflective Functioning Questionnaire (PRFQ)”（18 項目版）を日本語訳した後，その訳文をバイリンガルまたは国際学会の通訳ができる臨床心理士 3 名に修正してもらった。そして，修正後の訳文に対して，業者（ユレイタス）によるバック・トランスレーションが行われ，その指摘に基づいて最終項目を確定した。こうして日本語訳された 18 項目を「養育省察機能質問票日本語版」(Parental Reflective Functioning Questionnaire－the Japanese version: PRFQJ）と呼ぶ（7 件法）。

(3) 視点別意識尺度（津田，2010）

自己に対する意識，他者から見た自己に対する意識，他者に対する意識という 3 つの視点による意識尺度である。本研究では，「自己の内面への意識」計 7 項目と「他者の内面への意識」計 8 項目を用いた（5 件法）。

(4) Parental Self-Agency Measure（PSAM）日本語版（田坂，2013）

Dumka et al. (1996)の PSAM を田坂（2003）が日本語化した尺度である（8 項目；6 件法）。幼児期の子どもをもつ母親の育児自己効力感を複数の領域に分けずに 1 領域とみなして測定する。

(5) TAS-20（トロント・アレキシサイミア尺度）

小牧・前田・有村他 (2003)が作成した TAS-20（The twenty-item Toronto Alexithymia Scale）は，原版と同様に，アレキシサイミアを測定する「感情の同定困難」「感情の伝達困難」「外的志向」の 3 下位尺度から成る（5 件法；20 項目）。

3．結果と考察

(1) 因子分析と信頼性の検討

養育省察機能質問票日本語版（PRFQJ）の 18 項目について，因子分析（主因子法）を行った結果，固有値の減衰や項目内容から 3 因子が妥当と判断された。しかし，2 項目（No.7 私は，自分の子どもとのごっこ遊びに，積極的に参加するのが苦手です；No.11 私は，子どもの反応を誤解することがときどきあります）がどの因子にも負荷が低く（.34 未満），日本語版からは削除した。そして，残りの16項目で再度因子分析（プロマックス回転）を行った結果を Table 1 に示す。

第 1 因子は，“私は，自分の子どもがその行動の仕方をする理由がいつもわかります”や“私は，いつも自分の子どもが何をするのか予測できます”といった項目の負荷量が高く，「確信的省察」と

Table 1 養育省察機能質問票日本語版の因子分析（主因子法・プロマックス回転）

項目内容	第1因子	第2因子	第3因子
第1因子：確信的省察（α=.86）			
17. 私は，自分の子どもがその行動の仕方をする理由がいつもわかります	**.83**	−.09	.03
14. 私は，自分の子どもに対してすることを，なぜそうしたいのか常にわかっています	**.79**	.02	.05
8. 私は，いつも自分の子どもが何をするのか予測できます	**.74**	.05	.01
5. 私は自分の子どもの心を完全に読むことができます	**.70**	.18	−.05
2. 私は，いつも自分の子どもが何をほしがっているかわかります	**.64**	−.19	.14
第2因子：省察不全（α=.81）			
4. 私の子どもが知らない人の前で泣くのは，私に恥をかかせるためです	.12	**.83**	−.03
10. 私の子どもがときどき病気になるのは，私にしたいことをさせないためです	.11	**.80**	−.05
13. 私の子どもがぐずるとき，それはただ私を困らせたいだけです	−.02	**.73**	−.05
18. 自分の子どもが何を感じているかを推測しようとすることは無駄だと，私は思います	.05	**.62**	−.13
16. 私の子どもの行動は，理解するのが大変なほど混乱していることがたびたびあります	−.36	**.58**	.29
1. 私が自分の子どもに愛されていると確信できるのは，子どもが私に笑顔を向けてくれるときだけです	−.04	**.45**	.06
第3因子：省察的姿勢（α=.81）			
6. 私は自分の子どもが何を考え，何を感じているのだろうとあれこれたくさん思いをめぐらせます	.02	.09	**.75**
9. 私は，自分の子どもがどう感じているのか知りたいとよく思います	−.16	−.02	**.72**
15. 私は，自分の子どもがよくない行動をする理由を理解しようと努めます	.05	−.11	**.62**
3. 私は，自分の子どもがある行動や感じ方をする理由を考えるのが好きです	.23	.08	**.62**
12. 私は，自分の子どもの目線で状況を見ようとします	.12	.00	**.61**
因子寄与	3.35	3.33	3.02
因子間相関	第1因子	.22	.23
n=318	第2因子		−.38

解釈された。この因子は，今里他(2017)で見出された「確信的な理解」と類似している。第 2 因子は，“私の子どもが知らない人の前で泣くのは，私に恥をかかせるためです”や“私の子どもがぐずるとき，それはただ私を困らせたいだけです”といった項目の負荷量が高く，「省察不全」と解釈された。この因子は，今里他(2017)における「内省の失敗」因子に相当するであろう。第3因子は，“私は自分の子どもが何を考え，何を感じているのだろうとあれこれたくさん思いをめぐらせます”や“私は，自分の子どもがどう感じているのか知りたいとよく思います”といった項目の負荷量が

Table 2　養育省察機能と他の変数との相関

	他者の内面への意識	自己の内面への意識	育児自己効力感	感情同定の困難	感情表出の困難	外的志向
確信的省察	.10	.18**	.38**	−.11*	−.32	−.07
省察不全	−.10	−.02	−.25**	.36**	.12*	.28**
省察的姿勢	.43**	.48**	.34**	−.03	−.10	−.34**

n=318　* p<.05　** p<.01

高く，「省察的姿勢」と解釈された。この因子は，今里他(2017)における「内省的な姿勢」と類似している。3 因子での累積寄与率は，52.08%であった。

各下位尺度の信頼性を示すクロンバックのα係数は，「確信的省察」がα=.86，「省察不全」がα=.81，「省察的姿勢」がα=.81 となった。この結果，PRFQJ の内的整合性という意味での信頼性は高いと判断された。

(2)　妥当性の検討

妥当性検討のための尺度のα係数を算出すると，アレキシサイミア尺度の下位尺度のうち「感情の伝達困難」が.67，「外的志向」が.49 とやや低かったが，他の研究においても同様の数値が報告されているので，今回も両尺度をそのまま用いた。それ以外の尺度は，.80 以上の数値が得られており，信頼性は高かった。

養育省察機能質問票日本語版の下位尺度と妥当性検討のための尺度（下位尺度）との相関を Table 2 に示す。

「確信的省察」は，「自己の内面への意識」と低い相関を示したが，「他者の内面への意識」とは無相関であった。確信的省察は，自己のメンタライジングのあり方に注意を向けることに多少関連しているが，他者の内面への意識を伴うものではないといえるかもしれない。高すぎる確信的省察傾向は，他者の心をメンタライズできていると思い込む疑似メンタライジング（プリテンド・モードに属する）（Allen et al., 2008）に陥ることもあると思われ，そう考えると，確信的省察と他者の内面への意識との間に相関が見られなかったことは妥当な結果ではないかと考えられる。

しかし，確信的省察が高い母親は，意識的には自分の省察に自信を抱いていので，「育児自己効力感」は高くなるのだと考えられる。また，確信的省察は，「感情同定困難」および「感情伝達困難」とは低い負の相関を示した。これも，自分の省察に自信を持っている母親は感情の同定や伝達に困難を覚えることは少ないと思われるので，妥当な結果であろう。ただ，確信的省察は，外的な事象だけに注意を向ける傾向を表す「外的志向」とは無相関であるから，内的世界について考えない傾向ではないと考えられる。

「省察不全」は，自己と他者の内面への意識と無相関に近い結果であった。自己と他者への内面に意識を向ける傾向と子どもの心理状態への省察は，別の次元のことであり，子どもの心への省察のたには自己・他者の内面への意識以上のことが要求されるのだろうと思われる。

それに対して，「省察的姿勢」は，自己の内面への意識と他者の内面への意識のどちらとも中程度の（0.50 に近い）正の相関を示し，育児自己効力感とも（確信的省察の場合と同程度の）正の相関を示した。そして，「感情同定困難」や「感情伝達困難」とは相関がなく，「外的志向」とは低い負の相関を示した。省察的姿勢と自己および他者の内面への意識との正の相関も考慮すると，省察的姿勢は，感情を意識しようとする傾向であるが，同定や伝達とは別の特性なのだと思われる。省察（メンタライジング）は，それを試みることが重要な心的行為であるが，必ずしもいつも的確であるとは限らない。だから省察的姿勢は，感情の同定や伝達の成否とは相関がみられなかったのかもしれない。

4．おわりに

以上のように，養育省察機能質問票日本語版（PRFQJ）は，因子分析と下位尺度の内的整合性という点では高い信頼性を示し，加えてある程度の妥当性を示した。しかし，妥当性検討においては，無相関であったり低い相関しかなかったりした場合もいくつかあり，この質問票で測定される省察機能の性質が十分に明確にされたとはいえない。今後，妥当性の基準として他の尺度も加えて，妥当性の検討を続けていかなければならないと思われる。

（注釈）「養育省察機能質問票日本語版」の回答選択肢は，「全くあてはまらない，ほとんどあてはまらない，ややあてはまらない，どちらともいえない，ややあてはまる，かなりあてはまる，と

てもあてはまる」の７段階である。

引用文献

Allen, J.G. (2013). *Restoring mentalizing in attachment relationships: Treating trauma with plain old therapy.* Washington, D.C.: The American Psychiatric Publishing. 上地雄一郎・神谷真由美訳 (2017). 愛着関係とメンタライジングによるトラウマ治療：素朴で古い療法のすすめ　北大路書房

Allen, J.G., Fonagy, P., & Bateman, A. (2008). *Mentalizing in clinical practice.* Washington, D.C.: The American Psychiatric Publishing.　狩野力八郎（監修），上地雄一郎・林　創・大澤多美子・鈴木康之（訳）(2016)．メンタライジングの理論と臨床：精神分析・愛着理論・発達精神病理学の統合　北大路書房

今里有紀子・東條光彦・上地雄一郎 (2017).　養育内省機能質問票(PRFI)の作成ならびに信頼性・妥当性の検討. 兵庫教育大学教育実践学論集 ***18***, 37-48.

Bateman, A. & Fonagy, P. (2016). *Mentalization-based treatment for personality disorders: A practical guide.* Oxford: Oxford University Press.

Bateman, A. & Fonagy, P.　(2019). *Handbook of mentalizing in mental health practice (2nd ed.).* Washington, D.C.: American Psychiatric Association Publishing.

Dumka,L.E., Stoerzinger, H.D., Jackson,K.M., & Roosa, M.W. (1996). Examination of the cross-cultural and cross-language equivalence of the parenting self-agency measure. *Family Relations*, ***45***, 216-222.

Ensink, K., Bégin, M., Normandin, L., & Fonagy, P. (2016). Maternal and child reflective functioning in he context of child sexual abuse: Pathways to depression and externalising difficulties. *European Journal of Psychotraumatology*,7,30611. http://dx.doi.org/10.34402ejpt.v7.30611.

Fonagy, P., Steel, M., Steel, H., et al. (1997) *Reflective-Functioning Manual for Application to Adult Attachment Interview*, Version 4.1. Department of Clinical Health Psychology, University College London.

小牧　元・前田基成・有村達之他　(2003).　日本語版 The 20−item Toronto Alexithymia Scale（TAS−20）の信頼性，因子的妥当性の検討 心身医学, ***43***, 839-846.

Luyten, P., Mayes, L., C, Sadler, L. S., et al.　(2009). *Manual for the Parental Reflective Functioning Questionnaire-1 (PRFQ-1).* Unpublished Manual. Yale Child Study Center.

Luyten P., Mayes L.C., Nijssens L., & Fonagy P. (2017). The Parental Reflective Functioning Questionnaire: Development and preliminary validation. *PLOS ONE.* 2017; ***12(5)***: e0176218.

Midgley, N., Ensink, K., Lindqvist, K., Malberg, N., & Muller, N. (2017). *Mentalization-based treatment for children: A time-limited approach.* Washington, D.C.: American Psychological Association. 上地雄一郎・西村　馨（監訳），石谷真一・菊池裕義・渡部京太（訳）　(2021). メンタライジングによる子どもと親への支援：時間制限式 MBT のガイド　北大路書房

Slade, A., Aber, J.L., Bresgi, I., et al. (2004). *The Parent Development Interview-revised.* Unpublished manuscript. The City University of New York.

Slade, A., Grienenberger, J., Bernbach, E., et al. (2005). Maternal reflective functioning, attachment, and transmission gap: A preliminary study. *Attachment and Human Development*, *7*, 283-239.

田坂一子 (2003). 育児自己効力感（parenting self-efficacy）尺度の作成. 甲南女子大学大学院論集(人間科学研究編), ***1***, 1-10

津田恭充 (2010).. 視点別意識尺度の作成とその信頼性・妥当性の検討. カウンセリング研究, ***43***, 22-32.